

[花と文人趣味]展によせて

「犧牛首」の物語

—中国美術の近代的鑑賞の一例として—

大和文華館に所蔵される「犧牛首」(図1)は不思議な作品です。今日はほとんど注目されてこなかったこの作品について考えてみたいと思います。これと類似する作品があります(フォッグ美術館、図2)。これは周時代の「匱(い)」とよばれる水を入れて注ぐ道具です。文華館の作品と比べると眼や角の造形が類似しますから、もとはこのような作品の一部だったのでしょう。もしくはより大きな「尊(そん)」とよばれる青銅器の一部だったのかもしれない。

しかし文華館の作品は頭部だけです。何故なのでしょう。美術鑑賞は時代や地域によって変化します。中国の青銅器は古代にあっては神や祖先を祀る祭器でしたが、宋代から青銅器は美術鑑賞の対象となっていました。士大夫たちは古代の政治や学問に憧れ、青銅器を通じてその世界に近づくことができると考えたからです。また神秘的な造形が士大夫たちのこころをとらえたのでしょうか。士大夫に扮した乾隆帝像には、自らの青銅器コレクションを楽しむ姿が描かれます。青銅器が一旦「美術品」になると様々な出来事が起こります。大量の偽物があらわれ、発掘された青銅器にも様々な加工が施されて「鑑賞」にたえる「作品」となり、箱がしつらえられ、市場に流通していくのです。大和文華館の「犧牛首」もそのような改変を加えられた青銅

器の例と言えます。しかしこの作品が首だけであるのには、中国だけではない、あらたな美術鑑賞の伝統が考慮されなくてははいけません。それは西洋の彫刻鑑賞の伝統です。

書画を頂点とする伝統的な中国芸術の鑑賞では、「首」だけを鑑賞すると言うことはあり得ませんでした。中国人にとって彫刻と言えば小さな象牙細工や篆刻、玉器であり「首」ではあり得ません(図7)。ところが西洋には、よく知られたように、「首」や人体の一部を「彫刻」として鑑賞する伝統があります(ブロンズ牛首、メトロポリタン美術館、図5)。このような伝統が中国に流入すると、それまで信仰の対象であった仏像も美術品となりました。彫刻美術としての仏像の価値が高まった結果、高い完成された写実的表現を有する唐代の天龍山石窟の評価が、トルソーとして切り取っても鑑賞されるものとして一気に評価が高まったのは、必然の結果と言えるでしょう(図3)。

このようにかつて書法史の一部として興味をもたれていただけの仏像が、中国においていつ「美術」となり、力強い伝統を持つ文人たちにどのように受容されていったのか、その正確な過程は今後の大きな課題ですが、かつて乾隆二十四年(1759)到北京円明園海晏堂に、郎世寧(カステリオーネ)らの指導によって制作された十二支をかたどった噴水(図4)

もまた、1860年にフランス・イギリスの連合軍によって持ち去られ、首像として近年本国に帰ってきました(北京・保利博物館、図6)。ボストンには美術愛好家イザベラ・ガードナー(1340-1924)が蒐集した美術品が当時の邸宅のままの美術館に展示されていますが、そこには小さなガラス張りの棚に、かわいらしい東洋の小物が品よく並べられているのを見ることが出来ます。大和文華館の収蔵品には、このような西洋の美術鑑賞に合致する作品が多く収集されていますが、開館までに蒐集されていた本作も、そのように中国美術が西洋の新しい美術鑑賞の中で求められた形であったと言えるかもしれません。そには、1937-38年にかけて、ロンドンで開かれた国際中国芸術博覧会で欧米の新しい中国美術鑑賞の波に触れた初代館長・矢代幸雄の眼も働いていたでしょう。

ただ、このような新しい古美術の鑑賞は、ひとり西洋にのみあった訳ではありません。18世紀以来、中国

では古物再編とも言うべき、新しい美術鑑賞の動きが起こっていました。青銅器や玉器に木台をつけて、それ自体を鑑賞し、図譜を作り、記録、鑑賞する動きです(玩古図、ヴィクトリア&アルバート美術館、1728年、図7)。このような動きは、以降の日本の文人趣味にも大きな影響を与えていますが、その詳細はまた別稿で述べたいと思います。

美術作品は、決して当初の姿を完全に留めているわけではありません。どのような改変が、いつどこで、そしてなぜ加えられたかを知ることによって、作品に向けられた人々の新しい鑑賞のあり方、また作品が人間と共に生きていたことを知ることが出来ます。こうして作品は人間社会の中で新たな魅力を付加されながら生き続けていくのだと言えるでしょう。

(図4、図7は China: The Three Emperors, 1662-1795, Royal Academy of Arts, 2006. より転載させていただきました)

(塚本磨充)

図7

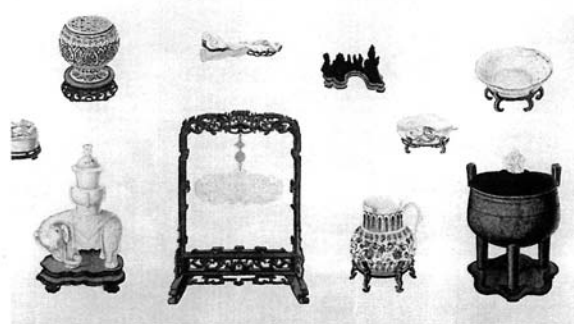


図1



図2



図3



図4



図5



図6



季刊 美のたより No.165

平成21年1月6日

発行 大和文華館